

げんでん ふれあい 福井

2012 SUMMER 第43号



第15回 ふくい風花隨筆文学賞 入賞作品紹介

ふるさと福井「酒井小浜藩初代藩主・江戸幕府大老

酒井 忠勝(一)」



財団シンボルマーク

公益財団法人「げんでんふれあい福井財団」は、福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的に、県民のみなさんとの絆を大切にした広報誌を目指します。

目次 43

●第15回 ふくい風花隨筆文学賞

入賞作品紹介 2 ~ 5

●ふるさと福井・人物シリーズ

「酒井小浜藩初代藩主
・江戸幕府大老
酒井 忠勝(一)」 6 ~ 7

●ふくいの伝統行事シリーズ

「椎村神社の祭り」 8

●敦賀市立博物館

誌上ギャラリー / 37 9

●福井の民俗文化 シリーズ 8

「福井の雨乞い行事」 10

●情報ファイル 11

表紙の説明

(表紙の写真は、本殿前で奉納される王の舞)

詳細は本誌8ページ参照)

国名にちなんだ小浜市若狭。久須夜が岳の南麓の小浜湾に面した小さな集落で、毎年五月五日に氏神の椎村神社の春祭りが盛大に行われ、一時村中にぎわいます。作物を荒らすシシ退治を演じるとされた王の舞と獅子舞は、獣害に悩む現代の農業そのもの。村中総出の神輿渡御や、人身御供を表すとされる稚児、特殊なお供えの粽などなど、一見の価値あるお祭りです。

第15回 ふくい風花隨筆文学賞 入賞作品紹介

「ふくい風花隨筆文学賞」(同賞実行委員会・福井県教育委員会主催、げんぶれあい福井財団特別協賛)の授賞式が、3月17日福井新聞社風の森ホールで行われました。

この文学賞は、福井県出身の芥川賞作家津村節子氏の随筆「風花の街から」にちなんだ賞で、毎年国内外から多くの作品が寄せられています。

15回となる今回は記念イベントとして、最優秀作品の朗読会「ヴァイオリンの調べとともに」や、津村節子氏の「ふくい風花隨筆文学賞15年間を振り返つて」と題する特別講演会も開催されました。(随筆とは、自己の見聞、体験、感想などを筆にさせて、自由な形式で書いた文章)

一般の部 (応募作品数1707編)

▽最優秀賞・福井県知事賞

中田朋樹(茨城県)「忘れがたき人々」

▽優秀賞・げんぶれあい福井財団賞

大城未沙央(沖縄県)「モハメッドの卒業」

▽優秀賞・福井新聞社賞

平澤佳奈(福井県立武生商業高校)「天晦日に」

▽優秀賞・仁愛女子短期大学賞

家森澄子(岡山県)「小さな秘め事」

寺阪明莉(福井県立武生商業高校)「マラン」

▽優秀賞・今野紀昭(岩手県)「おたふく面」

小林なつみ(福井県立武生商業高校)「例外な私」

▽優秀賞・泉直樹(福井県)「蒸焚き」

飛山日和(福井県立藤島高校)「地理沙(福井県立盲学校)」「帰り途」

▽優秀賞・堀田美有香(福井県立藤島高校)「小春日和の意味」

豊原祐美(仁愛女子高校)「私の帰り道」

▽優秀賞・若泉公重(福井県立武生商業高校)「おばあちゃんパワー」

田上慶一(福井県立高志高校)「川での出会い」

高校生の部 (応募作品数1488編)

▽最優秀賞・福井県教育委員会賞

竹内浩輔(福井県立盲学校)「ひかり」

▽優秀賞・げんぶれあい福井財団賞

田上慶一(福井県立高志高校)「川での出会い」

他に奨励賞22編



福井県知事、津村節子さん(前列中央)を囲んで

一般の部

最優秀賞

福井県知事賞



中田朋樹さん
(茨城県)

「忘れがたき人々」

一 受賞のことば

この隨筆にてて来る朝鮮族の若者は、学校にはほとんど行かず、十五歳の時にモスクワに出稼ぎに出たと話していましたが、驚いたことにトリリンガルでした。母語は朝鮮語。朝鮮族以外の人と話す時には中国語。そして、外国人と喋るときはロシア語を、自由自在に使いこなしていたのです。

シベリア鉄道に乗っていた他の人々も同様でした。私は漢字が書けたことと、朝鮮語を少し齧っていたことでなんとか会話ができたのですが、「ロシア語はできないんですか? 残念だなあ」と何度も言われたものです。肌の色や顔つきが違う人とコミュニケーションを取るには、まずロシア語、という文化圏が、ユーラシア大陸のかなり広い範囲に存在する、という事実を、私はこの旅行ではじめて知ったのでした。

「英語ができる人」という漠然とした思い込みが鮮やかに覆された驚き。世界は本当に多様であるという実感。これが私がこの隨筆を書く動機になりました。海の向こうにロシアをのぞみ、戦前の敦賀一浦塩航路でシベリア鉄道とも直接の関係があった福井県の賞を頂けたことは、本当に嬉しく、光栄に思います。

僕は人前で、伴奏もマイクもなしに独唱したことが一度だけある。歌うのが好き、という訳でもなく、流行歌にもからつきし疎い僕にとって、それは想像を絶する苦行だったが、その時はどうしても歌わざるを得なかつたのである。

七年前の三月、大学の卒業と就職を控えた僕は、モスクワ発北京行きの寝台列車に乗って、独りシベリアを横断していった。一段ベッドで四人一室の二等。乗客はほとんどが出稼ぎ帰りの中国人だった。満足な教育を受けておらず、僕が漢字を書くということだけで、日本も中国の一部だと思い込む彼ら。お喋りで人懐っこい彼らの好奇心に応えるために、僕はうろ覚えの中国語と筆談で毎日大汗をかいたものである。バイカル湖も過ぎ、既に同じ車両の大半の中国人と親しくなっていたある晩、僕は彼らの宴会に誘われた。四人用の客室に十数人がすし詰めになり、何ヶースものビール、ザーサイ、大きくなかった焼き豚、味付け卵などが並ぶ大宴会である。僕は入るなりモンゴル族の女性達の間に座られ、さあ飲め、さあ食べるの猛攻撃を受けた。酔いが

回ると歌が始まつた。中国の歌、モンゴルの唄、それからロシア民謡の「カチューシャ」。これはもう全員の合唱だ。気がつくとロシア人の車掌も一緒に歌つている。終わると今度は朝鮮族の若者が「カチューシャ」の替え歌を歌いだした。「飲一ぬ、飲一ぬ、酒飲めよ」という中国語の歌詞に皆が爆笑する。

今度は日本の歌を歌つて貰おう、といふ提案が出たのはその直後だった。

「歌つて歌つて!」

皆歓声を上げ、横に居た女性達が、

と僕の顔を覗き込む。

なんという展開! 僕は青くなつた。

これだけ盛り上がり後に歌える歌なんか僕は知らないし、ひとりで歌うなんて芸当はとてもとても……。ああ、けれどここで「歌えない」と言つたら

皆はどう思うだろう。場の空気は一気に冷め、僕はこの場に居たまんなくなるに違いない。それに僕はここに居る唯一の日本人だ。彼らは歌一つ歌えない、つまりない人種として日本人を記憶するかもしれない。

こんな誇大な観念を抱いたのは、間違ひなく酔つていたからだ。そしてそ

の醉いは、日本人、日本らしい歌、郷土愛、といった風な発想に僕を引いて行き、ついに中学校の音楽の授業で習つたある歌を思い出させた。

盛り上がらないこと甚だしい、といふことをはつきり意識しながら、僕は半分やけになつて立ち上がつた。

うーさーぎーおーいし カーのー やーまー

こーぶーなーつーりし カーのー カーわー

手拍子もできず、しんとしてしまつた室内。出稼ぎ労働者を乗せてシベリアの凍夜をひた走る列車の中で、およ

そ場違いなか細い声を張り上げていい滑稽さを呪いながら、僕は歌い続けた。

ゆーめーはいーまーも めーぐー りーーー

わーすーれーがーたき ふーるー サーとー

歌い終わつて椅子にへたり込むと、まばらな拍手が上がつた。皆なんだか神妙な顔をしている。

ややあって、替え歌を歌つた朝鮮族の若者が、

「それ、キリスト教の歌じゃない?」
と僕に訊いた。

「本當だ、讃美歌だよきっと!」
と言う声があちこちから上がる。

僕は思いがけない反応に「何言ってやがる」という反発を覚えたけれど、正直口も利けない位意氣消沈していたために、反論はできなかつた。

この恥ずかしい記憶が不意に全く別意味を持つて甦つたのは最近のことである。ある新聞の文化記事の中に偶然「ふるさと」の作曲者岡野貞一はクリスチャンであり、ゆつたりした三拍子のリズムは讃美歌のそれを受け継いでいる」という箇所を見出したのだ。僕は雷に打たれたような気がした。

驚きと共にあの時の記憶が鮮明に甦つて来た。十五歳の時にモスクワへ出たという朝鮮族の若者の童顔。モンゴル族の女性達の親切。客室を震わせた「カチューシャ」。なつかしかった。眞の国際人、文化人だったあの人々だけではなく、やけくそで「ふるさと」を歌う日本大学生の姿までもが、尋常ならざるいとおしさをもつて、僕の心に甦つて来たのだった。

最優秀賞

福井県教育委員会賞

「ひかり」



竹内浩輔さん

(福井県立盲学校高等部)

一受賞のことば

僕がこの作品を書こうと思った明確なきっかけというものは、実はありませんでした。ただ、一昨年の春から夏にかけて、父の病気の進行によって設置されたLEDライト。昨年の春、本校の卒業生である先輩と障害について交わした会話。この二つが繋がって、普段自覚していないかった障害者としての自分と、自分を取り巻く環境、さらには未来を考えてみようと思ったのです。

僕は盲学校で十三年間学んできたため、日常生活では障害による不便を感じたことが、ほとんどありませんでした。そのせいか自分が障害者であることを忘れ、世間の目などあまり気にせずに生きてきました。そんな僕と対照的だったのが、高校三年間だけ盲学校で学んだ先輩でした。先輩は世間の目を意識し、自分が障害者であることを深く悔んでいました。

ところが、卒業後大学に進学して久しぶりに帰ってきた先輩は、考えを変えているのです。障害を悔むからこそ、世間の目を意識するからこそ、自分に出来ることと出来ないことを自覚し、その上で依頼したい援助を明確に伝えることが必要だと。障害者の模範ともいえる眩しい先輩の考え方、僕は時には否定し、時には肯定して、納得していました。

今回の受賞を始まりとして、僕は障害と一緒に未来を生きることについて考え、行動したいと思いました。そして、先輩のように、僕も誰かの「ひかり」になれたらしいなと思います。

「のだ。僕もみんなと同じだ。この白い光だってそう。父に対する苛立ちでもなければ、家族への苛立ちでもない。時間は充分にあつたのに、「暗くて見えにくい」と言う些細な不安を、何でも話せるはずの家族に、僕は言えてなかつたのだ。素直にならない」と、信頼など生まれはしないのに。

「誰に対しても、僕は気を遣つていたのだ。僕は、誰か分かつて欲しいという顔に。」

「僕は学校が好きだ。中学部、高等部と進学して、いっさきに友だちが増えた。でも、時々その友だちに苛々する。時々口にする、「どっちでも良い」という言葉にだ。一人しかいなかつたら、ひとりが「どっちでも良い」と言えば、決定は残つたひとりに託される。つまり、僕だ。「どうして、いつも受け身だと教える。黒い空に浮かぶ月の光が、歪んだ。」

「俺さあ、家族とそういう話したことは見えないし、玄関だつて。僕はずつと、勘で歩いてきた。躊躇、血だらけになつた足を隠して帰つたこともある。溝にはまつたことも。でも、誰にも言えずにここまで来た。ところが父はその立場になれば、なんて便利な光を付けてくれることか。僕のことを「こん

今から一年前、わが家の玄関に眩しい光が灯された。LEDライト。父が買ってきた。家に着き、車から出ると階段の両側に少し柔らかな光が灯っている。照らされた階段は見やすい。玄関に向かうと、上から白い光が降りてくる。玄関にたどり着くと、下の方からこれまた眩しい光がさつと足元を照らす。これで躊躇うことなく、家に入ることができた。

こんなに灯りを付けるようになったきっかけは、父の病気だった。昔から父は糖尿病だったが、いつこうに對処しようとしたが、どんどん悪化した。視力は劇的に低下し、夜はもちろん、朝でも躊躇くなつた。父の目は奪われかけていた。このライトが灯つた日、僕は寂しかった。僕は視力が極端に低い。階段は見えないし、玄関だつて。僕はずつと、勘で歩いてきた。躊躇、血だらけになつた足を隠して帰つたこともある。溝にはまつたことも。でも、誰にも言えずにここまで来た。ところが父はその立場になれば、なんて便利な光を付けてくれることか。僕のことを「こん

なもんも見えんのかあ!」と、口ではオーバーに言うくせに。結局、父は僕のことを気遣つてはいなかつたのだ。母も。兄も。姉も。夜帰るたびに、僕はひねくれた。「壊れてしまえばいいのに。」しかし、光はいつだってどんな時だつて、優しく照らし続ける。

ある夜。晩飯を食べ終わり、ひとり外に出た。無情に反応した白い光を見ながら、僕は自分を哀れんだ。その時、気がついた。僕は父や母に、家族に、何も言つていなかつた。見えない、階段が見にくいくと。光が欲しいと、言つてなかつたことに。久しづりに、自分が「障害者」だと痛感させられた。一生僕につきまとうそれは、僕が障害者だと教える。黒い空に浮かぶ月の光が、

「のだ。僕もみんなと同じだ。この白い光だってそう。父に対する苛立ちでもなければ、家族への苛立ちでもない。時間は充分にあつたのに、「暗くて見えにくい」と言う些細な不安を、何でも話せるはずの家族に、僕は言えてなかつたのだ。素直にならない」と、信頼など生まれはしないのに。誰に対しても、僕は気を遣つていたのだ。僕は、誰か分かつて欲しいという顔に。」

「僕は学校が好きだ。中学部、高等部と進学して、いっさきに友だちが増えた。でも、時々その友だちに苛々する。時々口にする、「どっちでも良い」という言葉にだ。一人しかいなかつたら、ひとりが「どっちでも良い」と言えば、決定は残つたひとりに託される。つまり、僕だ。「どうして、いつも受け身なんだ。いい加減に気づけよ!」僕はいつも苛々した。

今頃になって灯された白い光は、僕の心の隅々まで照らす。僕の苛立ちは、実は自分に向けられていたのだ。友だちが「どっちでも良い」と僕に気を遣うように、僕もまた気を遣つていたのだ。自分の率直な感情すら友だちに伝えることができないかも知れない。僕は「障害者」である自分を、もう少し受け止められる気がする。

高校生の部

優秀賞

げんでんふれあい
福井財団賞

「川での出会い」



田上慶一さん
(福井県立)
(高志高校)

—受賞のことば—

今回は、自分が好きな場所で好きなことをしていたときに感じたことや気付いたことを書いたに過ぎません。誰にでも日常のなかでハッとするような美しいものはたくさんあって、ただそれに気が付くことが難しいのだと思います。書いていて思ったことは、見たことや起こったことをそのまま文章として表現することの難しさです。「きれいだな」と感じたことをどう書くとよいのか、うまく書こうと思って考えたのですが、結局思つたことをそのままに書いただけです。

私は、まだまだ素晴らしいものをたくさん見逃してしまっています。これから目標として、身の回りの些細なことにもしっかり目を向けて、その素晴らしさや美しさに気が付くことができるようになりたいと思います。

私は、よく幼い頃から暇さえあれば釣りに出かけていた。その先で色々な美しい物を見ることができた。それは私の大切な宝物であり、その場所に存在続ける。自然が長い、長い時間をかけて生み出したのだ。

川沿いの道は山と山の間を行く。自動販売機すらない小さな山村をいくつか通り過ぎる。6月の梅雨晴に胸を躍らせ、釣竿を握りしめる。葉の雫が久しづびの太陽にまぶしく輝きながら鏡のように私を写すのだ。小さな、たくさんの私が見守る中で、手に伝わってくる当たりを待つ。狙うのは岩魚だ。美しい模様は光が当たると虹のようである当たりのために釣りに行きたくなるのである。釣れた時の喜びは伝えきれないが、魚もそんなに馬鹿ではない。釣堀なり行けば必ず釣れるだろうがしかし、天然の岩魚はめったに釣れないものだ。だからこそ魅力をかねじるのかもしれない。

狙いは岩魚であるけれど、他にも多くの魚が釣れる。天魚や山女など、これらもまた美しい模様を持つていて、

溪流釣りの代表格である。とてもおいしく、自分で釣ったという達成感も加わり、よりいつもおいしく感じる。

塩だけと極めて単純な味つけだが、焼きたてではほっこりとした身が何とも言えない。家族で食べると食べられる身も多くない。一口一口、大切に味わうのだ。

その川は、別的一面を持っている。

夜釣り帰り、八時を過ぎる頃から小さな明かりがたくさん飛び交う。川が汚くては住むことができないため、最近、年を追うごとに少なくなっているようだ。成虫では短い間しか生きることができない、はかなくも美しい蛍に目を奪われてしまう。ほたるを見に来ている人はよく幼い子どもを連れている。その子どもたちは大きな声で歌う。

「ほ、ほ、ほたる來い。あっちの水はにがいぞ。こっちの水は甘いぞ。」

親は優しい目で見ている。ある時、私はほたるを捕えて虫かごに入れ、家に持ち帰ったことがあった。喜んでもらえただろうと思い、得意気に虫かごを出してほたるを見せたとき、私にこう

言った。

「ほたるの命は私たちよりもずっと、ずっと短いのよ。卵を生むために今、光っているのよ。」

私はまだ理解できなかつた。いや、小学二年生にはほたるの命の営みがよく分からなかつたのだと思う。自分で捕まえた宝物を手放すことがどうしてもできなかつた。結局、私はほたるを逃がしたと嘘をつけ、隠したのだった。後悔したのは、それから一、三日後の夜であった。まったく動かない。まったく光らない。ようやく、短い命といふものが何と無く理解できた。死んでしまったほたるに罪を感じながらも、いた川に流した。ほたるは見るものだ。

とこの時から思った。だから今でも、ほたるを捕まえる子どもがいると放してあげてほしいと思うのだ。

私が今まで、釣りに出かけ、目にし始めた生き物の中で翡翠ほど感動したものはない。青い翼に橙色の腹部を持つている鳥だ。川に飛び込み魚を捕る、私のライバルだった。私が一匹を釣る間に彼は十から十五もの魚を捕

された魚は巣に持ち帰るようで同じ場所に飛んで行った。おおよそその巣の位置は知っているつもりだ。幼い頃なら見に行つていただろう。しかし、眺めただけがよい美しい物もあることを

知つた後だつたら、そんなことはしなかつた。写真を撮ろうとしたこともなかった。一度、本当に近くまで来てくられたことがあり、カメラを出すと、恥ずかしがり屋の彼は素早く飛び去ってしまった。姿ははつきりと見ることができた。都市化によって、住む所を失つてしまつた。彼ははつきりと見ることができた。夫婦で巣を構えたのか、おそらく雌が夫婦で巣を構えたのか、..

美しい模様は光が当たると虹のようである当たりのために釣りに行きたくなるのである。釣れた時の喜びは伝えきれないが、魚もそんなに馬鹿ではない。釣堀なり行けば必ず釣れるだろうがしかし、天然の岩魚はめったに釣れないものだ。だからこそ魅力をかねじるのかもしれない。

狙いは岩魚であるけれど、他にも多くの魚が釣れる。天魚や山女など、これらもまた美しい模様を持つていて、

酒井忠勝（一）

文／中島辰男

筆者プロフィール

中島 辰男
Tatuo Nakajima

『筆者略歴』
昭和3年 小浜市生
昭和19年 県立小浜中学より
陸軍予科士官学校入学
昭和20年 敗戦により同校解散、帰郷
福井県連合青年団長、内外海郵便局長、小浜市内外海公民館長、福井県教育委員長、福井県立若狭歴史民俗資料館長などを歴任。
「福井県の誕生—近代の越前と若狭」「若越に想う」「若狭路往還」などの著作多数

若狭の宰相

明治4年（1871年）の廢藩置県と、その後の幾多の変遷を経て、明治14年2月7日に現在の福井県が誕生しています。

関ヶ原の合戦後の福井を大きく統治してきたのが、親藩の福井藩と譜代の小浜藩。

本誌では福井藩の松平春嶽公を、第26号から28号で取り上げました。

今回は、酒井小浜藩の基礎を築いた初代藩主忠勝公について、中島辰男氏に5回に分けて執筆をお願いしました。

旧制女学校時代に歴史の先生から、「時代の流れには必ず原因があり、経過があり、結果があり、結果がまた原因となる」と教えられたそうで、「歴史は現代を見直す鏡だ」と結んでいた。

某誌に、「徳川宗家19代が挑む関ヶ原の戦い4つの謎」という徳川家広氏の長文の論文が載った。

「天下分け目の戦い」がたつた一日で終わり、豊臣から徳川へと政権交代になつた不思議さを取り上げている。

その背景にあるのは、秀吉が仕掛けた朝鮮出兵に対する恩賞を、豊臣家の領地から出陣大名に分配するために、

家康が仕組んだ政権交代劇であると説いている。

眞実は中々わからないが、読者の一人がこの説に対し「曰からウロコ」と賛同し、「歴史を俯瞰する視点を変えることで、新たな文献無しでも全て

が説明できることを証明している」と寄稿していた。歴史のおもしろさであろうか。

これを読んだ87歳の女性が、「歴史の大切さを深く学んで」と題した感想を寄せ、「（）の中学生にわが意を得たり」と賛同した旨を述べていた。

序章

ある新聞の読者欄に13歳の中学生が、「勉強嫌いの私が歴史に熱中」との見出しで投稿していた。いわく「私が興味を持ったものがある。それは歴史だ」「歴史には自分たちの生きていいない時代のことが分かる楽しさがある」と。

さて、小浜藩主となつた酒井忠勝は、天正15年（1587年、文禄の役・朝鮮出兵の年）から寛文2年（1662年）までの76年間の生涯であった。



本丸御殿跡にある小浜神社

戦前の山口、鹿児島両県出身の総理大臣は伊藤博文以下8人。就任期間は昭和20年までの全期間の46パーセントを占めている。

戦前に制度化されていた華族制度では、維新以降の功績による勲功華族は鹿児島県が83人、山口県が75人（次は高知県33人、福井県は平均に近い11人。0人が4県ある）と他県より断トツの数である。

郷土の偉人顕彰者にも上がっていない。前庭に、姉妹都市で忠勝の前封地である川越市から寄贈された姉妹のブロンズ像の傍らに、若狭ロークタリークラブ創立45周年記念事業により石坐像が建立された。）

大老酒井忠勝の評価は、封土嶺南では今ひとつ感がある。この小論では、改めて忠勝について先駆的研究事跡に

維新から敗戦の日まで、両県出身の指導者がわが国のあるように大きくかかわって来ていたかが分かる。

わが福井県はどうか。総理は海軍大将岡田啓介ただ一人である。嶺南に限れば残念ながら皆無。しかし、歴史をさかのぼれば江戸時代の初期、幕府の要職を32年間も勤めた酒井忠勝は、今

の総理にも比定される人物だと考える。ただ長いというだけでなく、將軍秀忠・家光・家綱の3代に仕え、江戸幕府300年の平和の時代への政策を樹立しているからである。

忠勝こそ若狭の総理ではないかと思う。しかし、死後400年近く経過したが、毎年5月2日（明治政府の神社創建許可の日）の小浜神社例祭にも特に忠勝の遺徳を偲ぶ行事が営まれる事はないようである。（因みに幕末の福井藩主松平春嶽も政治総裁職に就任、嶺北の宰相である）

絢爛たる経歴



忠勝坐像（剃髪、空印と号す）

天正15年（1587年）
酒井忠利の長子として、二河国西尾（西尾市）に生まれる

寛永5年（1628年）
父、卒す。遺領を加え8万石に
川越城主になる（41歳）

寛永5年（1628年）
家光卒す。家綱11歳で4代将軍に。
江戸牛込邸で卒す（76歳）後代の藩主に比べ大変長命であった

天正18年（1590年）
家康が秀吉によって関八州を与えると、家康に従い父と共に武蔵川越に移る（4歳）

寛永7年（1630年）
次の藩主となる忠直誕生。家光抱瘡になる
元和9年（1623年）
大御所秀忠、卒す。武蔵国で2万石加増され10万石に（46歳）

幕府覆滅をはかった慶安事件が露見、政権の交代を取り仕切り、幕政の安定を図る（65歳）

明暦2年（1656年）
日光山で剃髪、空印と号す（74歳）

慶長5年（1600年）
関ヶ原の合戦に初陣（14歳）（徳川直参の軍を率いた総大将の秀忠と共に、関ヶ原に遅参した話は有名）

寛永9年（1632年）
大御所秀忠、卒す。武蔵国で2万石加増され10万石に（46歳）

寛文2年（1662年）
江戸牛込邸で卒す（76歳）後代の藩主に比べ大変長命であった

慶長14年（1609年）
父と共に江戸へ参府し、父は老中に、忠勝は讚岐守に叙任（23歳）

寛永11年（1634年）
家光上洛。家光は姉婿の小浜藩主京極忠高を松江26万石へ国替え。その後、忠勝は若狭・越前敦賀・江州高島郡11万3千5百石を拝領して、小浜城に入る（48歳）

忠勝は寛永11年（1634年）から4回、期間は計1ヶ年にも満たないが、藩主を22年間勤め、藩の家老に対する江戸からの書き下し（指令）は4百通に達している。

元和6年（1620年）
将軍秀忠の命により家光付きとなる（34歳）

寛永13年（1636年）
下野国1万石加増、小浜城天守閣完

忠勝は寛永11年（1634年）から4回、期間は計1ヶ年にも満たないが、これは幕府の重鎮で、江戸を離れることが出来なかつたからである。酒井家から、2度にわたつて地元小浜に寄贈された「酒井家文書」は、忠勝の藩主としての施政のありようを今に伝えている。

元和9年（1623年）
家光20歳で3代将軍になる。家光に扈從して上洛、家光より二条城の傍らに2万坪の京都屋敷を拝領する（37歳）

寛永18年（1641年）
幕府大老に就任（52歳）

忠勝は寛永11年（1634年）から4回、期間は計1ヶ年にも満たないが、これは幕府の重鎮で、江戸を離れることが出来なかつたからである。酒井家から、2度にわたつて地元小浜に寄贈された「酒井家文書」は、忠

元和6年（1620年）
将軍秀忠の命により家光付きとなる（34歳）

寛永15年（1638年）
幕府大老に就任（52歳）

忠勝は寛永11年（1634年）から4回、期間は計1ヶ年にも満たないが、これは幕府の重鎮で、江戸を離れることが出来なかつたからである。酒井家から、2度にわたつて地元小浜に寄贈された「酒井家文書」は、忠

文久3年から慶応3年9月までの3年10ヶ月間、将軍後見職や禁裏守衛総督として、御所に近いこの小浜藩邸を本拠として維新の動乱に対処したので、大政奉還構想の地と言われる。なお、平成14年、御池通りの藩邸跡の篤志家の店頭に「小浜藩京都屋敷跡」の碑が130年ぶりに建立され、小浜市長により除幕された。

寛永元年（1624年）
上総・下総・武藏で加増、2万石となり、父と共に老中となる（38歳）

寛永19年（1642年）
全国的飢饉のため、忠勝小浜に入る（54歳）

忠勝は寛永11年（1634年）から4回、期間は計1ヶ年にも満たないが、これは幕府の重鎮で、江戸を離れることが出来なかつたからである。酒井家から、2度にわたつて地元小浜に寄贈された「酒井家文書」は、忠

寛永20年（1643年）
天皇即位式のため上洛、途路小浜に入れる。（忠勝最後の小浜入り）

寛永20年（1643年）
諸社寺の修・造立を行う（60歳）

忠勝は寛永11年（1634年）から4回、期間は計1ヶ年にも満たないが、これは幕府の重鎮で、江戸を離れることが出来なかつたからである。酒井家から、2度にわたつて地元小浜に寄贈された「酒井家文書」は、忠

正保2年（1645年）
諸社寺の修・造立を行う（60歳）

寛永22年（1649年）
「慶安の触書」公布。長男忠朝を廢嫡し、4男忠直を嫡子とする

忠勝は寛永11年（1634年）から4回、期間は計1ヶ年にも満たないが、これは幕府の重鎮で、江戸を離れることが出来なかつたからである。酒井家から、2度にわたつて地元小浜に寄贈された「酒井家文書」は、忠

慶安2年（1649年）
家康33回忌、日光東照宮に五重塔建

寛永4年（1627年）
立寄進（64歳）

忠勝は寛永11年（1634年）から4回、期間は計1ヶ年にも満たないが、これは幕府の重鎮で、江戸を離れることが出来なかつたからである。酒井家から、2度にわたつて地元小浜に寄贈された「酒井家文書」は、忠



空印寺（小浜市）に並ぶ酒井家14代の墓碑

ふくいの
伝統行事

福井県指定無形民俗文化財

「椎村神社の祭り」

小浜市

若狭のなかの若狭

若狭地方には国名にちなんだ二つの大名町と、小浜市若狭の二つの地名があります。ご存知のように、前者は平成の大合併で名づけられた町名で、後者はもとは「若狭浦」とも称しました。当地は小浜藩の国学者、伴信友の『若狭旧事考』によれば古くは「西浦」とか「椎崎」と呼ばれていた海岸になりましたが、ある年に神の祟りで疫病がはやったときに隣の「東浦」に移住し、国名にちなんで「若狭浦」と称しましたのが現在の若狭地区の由来といわれています。なお、滋賀県や石川県の能登地方には小字の「若狭」が多数あり、古代地名の「若狭」を考える際の参考になります。

椎村神社の春祭り



神輿の渡御

祭り当番の役割分担

午前10時ごろに神社の本殿前で祭典が行われたあと、境内に安置した神輿の前で二分ばかり獅子舞と王の舞（天狗舞）が奉納され、その後神輿を担ぎオフダバと呼ばれる村中の御旅所へと巡幸いたします。

また若者たちは太鼓担ぎやジンジヤドの接続役をはじめ、轍立てや轍おろしなどの力仕事を受け持ち、次代を担う心構えを見習うところに意義があります。

八品の神饌（神様への供え）の他に、小さな粽が特殊神饌として作られます。経験豊かな年長の女性が担当し、火打ち石でおこした清淨な火で蒸して全戸分用意します。また「神様の弁当持ち」と呼ばれる神持ちは、おしめを付けているものや月経中の者、不幸のあった家は当然除外して選ばれることになっています。藁の据え輪を持つのは頭上に神饌を戴いたなごりにほかなりません。

さて、オフダバと呼ばれる村中の御旅所に渡御の一行為到着すると、ます

当地は久須夜岳の南麓にある小浜湾に面した戸数15戸ほどの半農半漁の集落で、宗旨は臨済宗。かつての村跡の谷間に鎮座する椎村神社は、天平3年（731年）創建の「延喜式」神名帳に見える古社とされています。祭神は青海首椎根津彦神で、一世紀ほど後に山王社を勧請して山王二宮権現とも呼ばれました。

当社の春祭りは、毎年5月5日。前日宵祭には氏子が協力して幟立て

神輿の渡御は、太鼓、ホーロー（鉾）、神持ち、小神輿、稚兒、当番、御弊、禰宜、神輿、戸主と続きます。厳粛な神事に奉仕をするため、早朝に海岸で潮垢離をして身を清めてから決まりの装束をつけます。一年のあいだに葬儀や不幸のあった家はお祭りには参加できません。神事にはケガシをさけ村の伝統を固く守ってきました。

うち最年長者が務め、例祭を取り仕ります。当番は一年交替で担当し、神輿かきや小神輿かきは他の戸主が分担。



獅子舞

さて、オフダバと呼ばれる村中の御旅所に渡御の一行為到着すると、ます

作業を荒らすシテ退治を再現します。最後に鉾を離して腰に両手をあて空を仰ぎつつ、三歩下がり剣印を左右の手で作り、前を突くような姿で三歩前進して終了となります。



ジンジヤドでの直会



弁当持ちの稚兒



オフダバでの王の舞

舞と王の舞を奉納し氏子回りをしたあと、ジンジヤド（当屋）に移ってまずは床の間を前にして神事を後、昼食を兼ねた直会が楽しく催され賑わいます。

七夕図 一幅 鷹司兼熙贊 土佐光成筆



正徳元年近衛將監藤原光成筆

本図は雲上の織機の傍らに座つて人待ち顔で彼方に目を向ける、中国風の衣装の女性を描いています。女性が身にまとう領巾や髪を結うリボンが風になびいて、彼女の逸る心を映しているかのようです。

多くの人々が、一日見てこの美女が織姫であると気がつくのではないでしょうか。

古来あまりに有名な伝説によれば、織姫（織女）と彦星（牽牛）は夫婦仲が良過ぎて天の神の怒りを買い、年に一度、七月七日の夜にだけ会うことを許されたといいます。その昔の物語の、今まさに二人が再会せんとするワンシーンを描いた、絵巻の一場面のような作品です。

七夕は、現在では夏の行事となりっている千載和歌集にある印象ですが、本来旧暦の七月は秋とされており、本図の贊和歌にも「秋風に」とあります。七夕は五節供の一つです。一

五月五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重陽と、季節の移り変わりに合わせてそれぞれに健康や長寿などの祈りをこめた祭事が行われました。

七夕は中国では、古くは魔よけの風習がいつしか牽牛・織女伝説と結びつき、技芸の上達を願う祭事ともなりました。日本には元来水辺で機を織る「棚機つ女」など、水にかかる信仰などが各地にあり、それらが中国から伝えられた習慣と習合していったと考えられています。

作者の土佐光成（1646～1710）は、伝統的な大和絵の流派である土佐派中興の名手と言われた光起（1617～91）の子で、父の跡を受けて宮廷絵所預となっています。本図の織姫の白い肌や纖細な顔立ち、上品で鮮やかな色彩で細部まで表現された衣装や織機などからも、優れた画技をうかがうことが出来ます。

□絹本着色
□法量 40.5×56.5cm
□江戸中期
□贊 「七夕のあまつひれふく／秋風に
やそのふなつを／御舟いつらし」
□落款 土佐正六位下左近衛將監藤原光成筆
□印章 「光成印」朱文方印

福井の民俗文化

暮らしの
一古典一

福井の雨乞い行事

シリーズ 8

花笠踊り

越前市柳には県指定文化財の「花笠踊り」が伝えられています。白と水色を重ねた着流し姿に花笠をかぶつた、子供から青年まで、むらの男全員が、扇を回しながら中世風の歌にあわせて舞う。それが花笠踊りです。

今回は、いつもの「福井の民俗文化」と違っています。なにしろ、多分、今までどこにもなく、私も本当のものは一度も見たことがないのですから。とは言つても、他地域と同じよう、県内でもかつては「祈雨」の行事があちこちで行われていました。そんな中から二つだけ紹介します。

ふたつの雨乞い

古い額があつたと伝えるものは何もありません。

私は神社の場所が気になりました。



岩屋白山神社の雨乞龍の額

長い間途絶えていましたが、昭和五十年代に、踊りが復活され、盆の期間に練習が行われます。もともとこの踊りは雨乞のお礼に、秋になつて行われました。練習も積まなければならぬ、神社境内にむらじゅうから集めた臼を並べ、その上に板を敷いて舞台を作り、屋根をかける。

マントウもたてて境内を飾る。

昭和十年代の最後の奉納の機会の写真を見ると、境内は見物の人でいっぱいです。それだけの人が来るとなると、むらじゅうの家がご馳走を作つてお客様をもてなしました。お

近江ではにぎやかな雨乞が行われていました。その一つ、龍の作り物が練るという雨乞をしたところで聞いた話、「一ヶ月も雨が降らなければ、そのうちに雨が降るに決まりや、そのうちに雨が降るに決まりて」という言葉もあります。冷害をもたらす雨続きに比べたら、不安は少なかつたのでしょう。

これは現代の人だから言えるのかかもしれません。しかし「日照りに不作なし」という言葉もあります。冷害をし、お礼の踊りをしたのも、水不足の切実さはあっても、そんな安全感があったのではないかと、思つたりします。

柳の人が一週間も仕事を休んで雨乞をし、お礼の踊りをしたのも、水不足の切実さはあっても、そんな安全感があつたのではないかと、思つたりします。

いですが、



越前市柳の花笠踊り

勝山市北郷町岩屋の白山神社は、奥越では割りに知られた雨乞の靈地でした。ここでは拝殿に龍を描いた額が掲げられています。この龍を、勝山盆地のあちこちの農村から来た人たちが、蓑を着て、水をつけた笹でなでるというのです。にじんだり、線がところどころ消えかかっているのは、たびたびなでられたからかもしません。龍は雨乞によく現れるので、ここもその一つという訳です。ところがこの額の裏を見ると、文政二年の銘があります。とすると、この龍に雨乞を始めたのはそれより後、たかだか二百年前からなのか? それとも、この額の奉納以前にも古い龍の額があつたのか?

山に切り込む沢の入口、岩が積み重なり、そこには杉の巨樹が森を作つていて。岩の表面はこけに覆われ、水が地表に湧きだしている。水がわき出る場所だからこそ、雨乞が行われてきた可能性もある。なにしろ泰澄大師が自ら十一面觀音像を刻み、寺をおこしたといふところなのです。

正直なことをいふと、こここの雨乞については、笹でなでたことしかわ

かっていません。雨乞にはほんとうは、さまざま要素があるはずなのですが。

場所は柳の村を見下ろす権現岳の山頂。そこは広場になつていて、松ヶ岳神社の祠があります。雨乞をするとなると、広場を囲むように注連縄を張り巡らし、御幣を玉にしたようないボンデンをいくつもたてる。柳の寺の住職が行者になつて祈祷を行つた。子供から青年まで、むらの男全員が、扇を回しながら中世風の歌にあわせて舞う。それが花笠踊りです。

当財団は公益財団法人に移行しました

当財団では、福井県内の文化振興を図るために県内の文化団体に対し、毎年支援・助成を行っています。平成24年度は、計96団体から応募があり、それぞれ3月29日と5月17日に「助成事業選考委員会」を開催し、計95団体（うち新規に助成を受ける団体は28団体）に対して、14,097千円の助成を決定しました。

② 学術・科学技術の振興や文化・芸術の振興などの公益目的事業を行うことを主たる目的とし、法律に定める公益認定の基準に適合して、行政による認定を受けた公益社団法人・公益財団法人（認定後も引き続き行政の監督を受けています）のいずれかに移行することになりました。

国が進めている公益法人制度の抜本的改革により、従来の民法に定める公益法人は、
 ① 事業の公益性の有無にかかわらず、登記をするだけで設立することができる一般社団法人・一般財団法人（行政による監督も受けません）
 余金を分配することは出来ません）

と
 「公益財団法人
 げんてんふれあい福井財団」

今回、福井県知事の認定を受け、平成24年4月1日付けで

当財団は、日本原子力発電(株)創立40周年記念事業の一環として、「地域社会の発展に役立ちたい」という願いから平成9年に設立され、今年で15年目を迎えることが出来ました。

「地域文化の振興」を図り、「ふれあい」とゆとりのある地域社会の実現に寄与する」という、当財団の定款に定める目的を達成するために、今後とも全力で取組みます。ご支援をお願い致します。

平成24年度 財団助成事業決まる

文化団体など95団体に14,097千円を交付

当財団では、福井県内の文化振興を図るために県内の文化団体に対し、毎年支援・助成を行っています。平成24年度は、計96団体から応募があり、それぞれ3月29日と5月17日に「助成事業選考委員会」を開催し、計95団体（うち新規に助成を受ける団体は28団体）に対して、14,097千円の助成を決定しました。

平成24年度 財団助成事業交付金一覧

助成対象事業	団体数	助成交付金
地域文化の振興事業	伝統芸能（行事）の保存・後継者育成事業	9 (千円) 1,650
	郷土史の研究活動・文化遺産の伝承事業	11 1,470
	市民文化団体の活動事業	31 4,540
	国際文化交流団体の活動事業	1 200
	地域文化の醸成・継承活動事業	10 1,157
ふれあい及びゆとりの創造事業	ボランティア団体等の活動事業	12 920
	各種文化サークル活動事業	6 520
	環境保全実践団体の活動事業	5 420
芸術鑑賞機会の提供及び文化創造事業	優れた芸術公演・展示の開催事業	1 500
	市民参加型芸術文化活動事業	9 2,720
合 計		95 14,097

島崎佐知恵さん 平成22年度げんてん芸術新人賞(邦楽)受賞者

「PANDORA & SUIZAN」結成10周年記念コンサートで演奏



鯖江市河和田小学校を訪問

【メンバー】

水井推山(尺八)
 酒井みゆき(箏)
 後藤佳奈(箏)
 酒井裕美子(箏)
 島崎佐知恵(三絃、十七絃)

問合せ先: 0776-36-8501 島崎さんまで

校近くに及んでいる。
 APECエネルギー大臣会合歓迎夕食会でのウエルカム演奏や、ふるさと子どもコンサート（ハーモニーホールふくい）、「観月のタベコンサート」（鯖江市本山誠照寺）での演奏など、邦楽の魅力をより高い水準で、広く一般に提供するための活動を続けている。

「伝統音楽は、後世に伝えていくべき日本文化。次世代を担う子ともたちの情操教育にもつながる。それぞれ仕事を持ちながらの活動は大変だが、これからも頑張りたい」と話して下さいました。

子供たちに本物の文化芸術を鑑賞する機会を提供するために、県などが実施している福井県芸術鑑賞教室での演奏や、メンバーが直接小中高校を訪問しての演奏は、これまでに100回開催されました。

県内在住の邦楽（筝・三絃・尺八）演奏家5人によるユニット「PANDORA & SUIZAN」の結成10周年記念コンサート（当財団協賛）が、6月3日、ハーモニーホールふくいで



十七絃を演奏する島崎佐知恵さん（右から2番目）



—財団助成事業の日程等—

本誌の読者アンケートで、「財団が助成を決定した事業の開催日程を、情報ファイルに載せてほしい」とのご要望を頂きました。8月以降に開催されるもので、一般の人も参加（鑑賞）できる事業の主なものについて、その概要をお知らせします。各団体の記念大会など、充実した内容のものも多いので、是非参加してみて下さい。

期日等は事前に確認をして下さい。

事業名	場所	期日	照会先 入場料 その他
第10回 花筐薪能	越前市花筐公園能楽ステージ	8/12 17:00～	☎ 0778-42-0361 S席5,000円 A席3,500円
県指定無形民俗文化財「福谷大火勢」	おおい町福谷区火勢山	8/14 19:30～	☎ 0770-78-1621
県指定無形民俗文化財「菅浜精靈船送り」	美浜町菅浜海水浴場	8/15 18:00～	☎ 0770-37-2730
琴城流大正琴グループ・シンデレラ 「30周年記念ありがとう長寿コンサート」	越前町生涯学習センター 朝日多目的ホール	8/19 13:00～	☎ 0778-34-0683
吟詠尺八塾懇親館第12回発表会	越前市JA越前たけふ4階大ホール	9/2 2 10:00～	☎ 090-2832-0543
沢井箏曲院福井研究室 島崎久子13回忌「箏・しのぶ会」	福井県立音楽堂	9/15 13:00～	☎ 0776-36-8112
混声合唱団福井コーラルアカデミー 25周年記念定期演奏会	福井市アオッサ県民ホール	9/17 14:00～	☎ 0776-22-4170 1,000円
ふくい県民総合文化祭 第22回福井県市町選抜芸能祭	坂井市ハートピア春江	9/23 12:00～	☎ 0776-81-2273
第65回全日本合唱コンクール中部支部大会	福井県立音楽堂	9/29～9/30 9:40～	☎ 0770-25-0684 1,000円 (小中高生 800円) 未就学児童用親子鑑賞室有り
福井市指定無形民俗文化財「オシッサマのお渡り」	福井市本堂高雄神社	10/7 14:00～	☎ 0776-37-1234 前祭 10/6 20:00～
清水混声合唱団 25周年記念コンサート	福井市清水地区きらら館	10/13 14:00～	☎ 0776-98-3330
ふくい県民総合文化祭 第32回福井県市町文協選抜美術展	南越前町南条文化会館	10/13～10/15 9:00～	☎ 0778-47-8005
岳心流つるが岳心会創立35周年記念吟詠発表大会	敦賀市民文化センター	10/14 9:30～	☎ 0770-27-1168
吟道光世流志清吟社福井地区創立25周年記念大会	福井市アオッサ県民ホール	10/21 9:30～	☎ 0778-51-3790
第94回福井菊花芸術展 (福井県独自の大菊7本仕立てを中心に)	福井市本願寺派福井別院	10/27～11/4	☎ 090-3765-3386
第3回きらりアート展 (障害者及び要特別支援児童・生徒たちによる公募美術作品展)	若狭町パレア若狭ギャラリー	11/10～11/23 9:00～	☎ 0770-64-1788
お話しとワークショップ 「介護に活かすとっておきのコミュニケーション」	未定	11月の予定	☎ 0770-24-1358 1,000円、500円
鯖江郷土史懇談会創立20周年記念事業 間部家藩祖詮房展	鯖江市まなべの館	11/20～12/9	☎ 0778-51-5999
鯖江郷土史懇談会創立20周年記念事業 記念講演	鯖江市まなべの館	11/24 14:00～	☎ 0778-51-5999
紫洲流日本明吟会福井県本部創立55周年記念発表大会	福井県生活学習館ユー・アイふくい	11/25 9:00～	☎ 0776-21-1578
第2回宇野重吉演劇賞受賞作品「橋・分断」公演	福井市文化会館	12/2 14:00～	☎ 0776-25-2407 前売り1,500円 (学生1,000円)
名田庄落語を楽しむ会	おおい町里山文化交流センター	12/2 13:30～	☎ 090-3274-9428 1,000円 (小中高生無料)
第8回つるが第九演奏会	敦賀市民文化センター	12/9 14:00～	☎ 0770-20-1319 3,000円
第20回若狭小浜日本の第九演奏会	小浜市文化会館	12/9 15:00～	☎ 0770-53-9700
(一社)若越書道会創立80周年記念 第42回若越書道会展	福井県立美術館	12/14～12/16 9:00～	☎ 0776-57-2866 作品募集締切 9/30
(一社)若越書道会創立80周年記念講演会	福井市福井パレスホテル	12/15 (予定) 14:00～	☎ 0776-57-2866 講師、演題は未定
子どもミュージカルフェスタ	福井市アオッサ県民ホール	25' 2/2 昼・夜 (予定)	☎ 0776-87-0003

財団イベント情報

ビートフェニックス2012	Def Tech、SEAMO、Ms OOJA、BENI 他	平成24年 8/18(土)	福井フェニックス プラザ 大ホール	福井エフエム放送主催、 財団協賛 (前売)6,300円
劇団民藝福井公演「カミサマの恋」	奈良岡朋子 主演	平成24年 9/ 1(土)	福井市 アオッサ8階 県民ホール	福井新聞社主催、 財団協賛 (前売)4,700円
今川裕代 ピアノ・リサイタル	今川裕代	平成24年 12/ 7(金)	若狭町 パレア若狭 音楽ホール	パレア若狭主催 財団協賛 (全席指定)1,500円
ウィンター・オルガンコンサート ア・カペラコーラスと 祝うクリスマス	ヴォーチェス8、鈴木優人	平成24年 12/16(日)	県立音楽堂 大ホール	福井県文化振興事業団 主催、財団協賛 (全席自由)1,000円